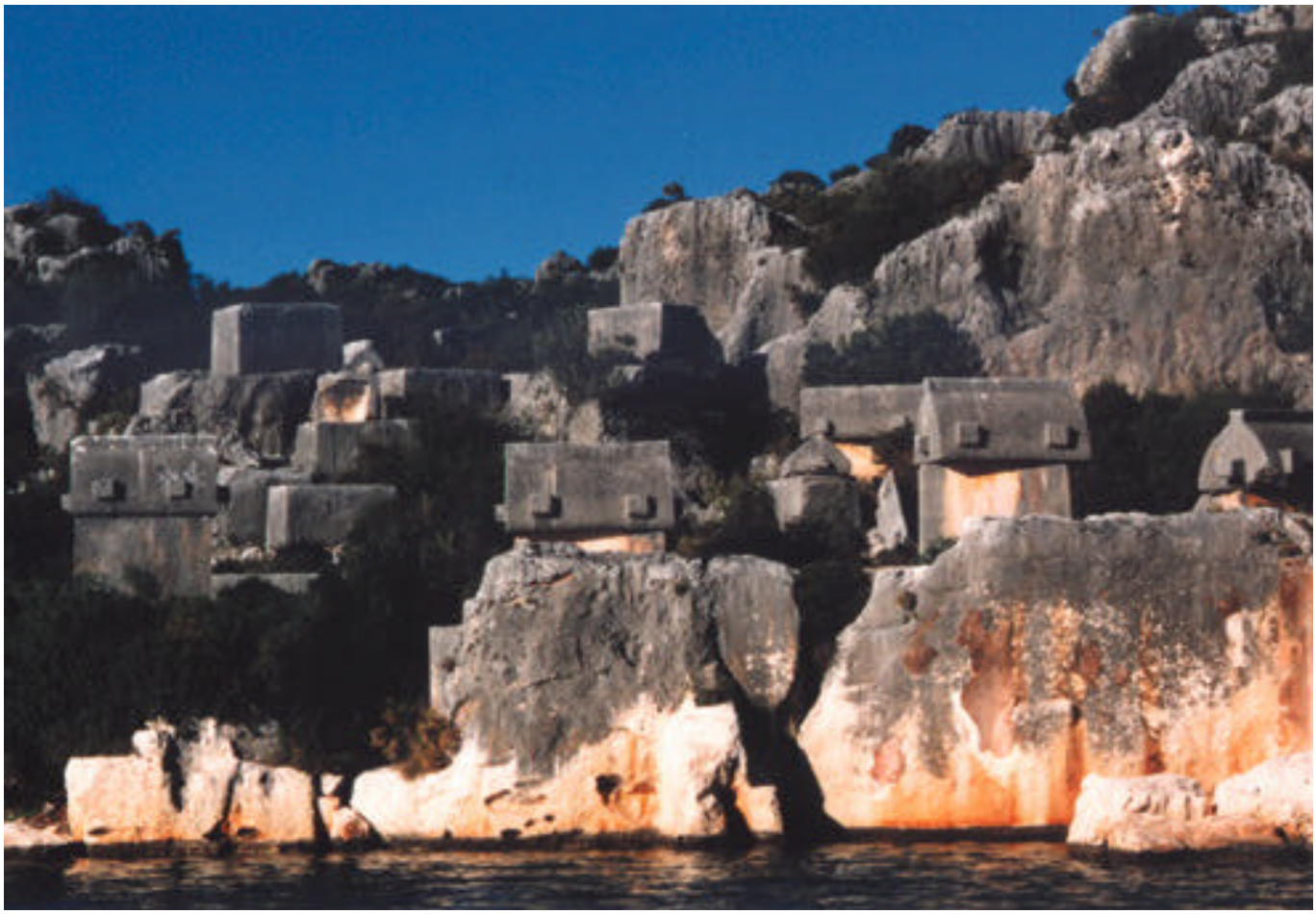


カシを目指して

トルコの地図を開くとき、ふと半世紀以上も前の高校時代を思い出します。地学の教科書に、パミール高原から西へ走り、最後にはバルカン半島からアルプスに到る大きな褶曲山脈が、トルコの南西部でいったん海へ沈む様子が描かれていました。そこがまさに今回ご紹介するリュキア海岸です。

パタラ

クサントス、レトゥーンから東へ走ると、風が次第に磯の香を帯びてくるように感じます。やがてパタラの標識が目に入るでしょう。たしかその界隈は、いくぶん湿地帯になっていたはずです。幹線を右へ折れて田舎道に入り数キロ、やがて三つのアーチを持つ凱旋門が現れます。資料によればここパタラは、聖ニコラスつまりサンタクロースの出生地だそうですが、今それにつながる何ものも感じられません。さらに奥に進むと、各所に断片化した廃墟が散在していますが、円形劇場だけは、半ば砂の中ながらもなお形を止めています。

この劇場の最も高いところから見渡すと、海までの距離はかなりあったと記憶していますが、ローマ時代にはこの町に港があって、使徒パウロも船で出入りしたそうです。きっと商業都市として栄えたことでしょう。この遺跡の現在の風情は、必ずしも一般旅行者の目を見張らせるようなものではありませんが、砂に込められた時の移り変わりに思いを入れるには、格好の場所かもしれません。

カシ

パタラ遺跡をあとにして国道に戻りカーブを登っていくと、やがてカルカンの町を見下ろすでしょう。海の青さがひときわ目に入る一帯にさしかかります。カルカンもやはりギリシャ人の町だったようで、一九二三年の民族交換の悲劇を味わった町だそうですが、今は開発が進んでリゾートタウンになっています。ガソリン補給以外に立ち寄ったことはありませんが、もし時間が許せば、きっとむせ返る南国の香りがエンジョイできるはずです。

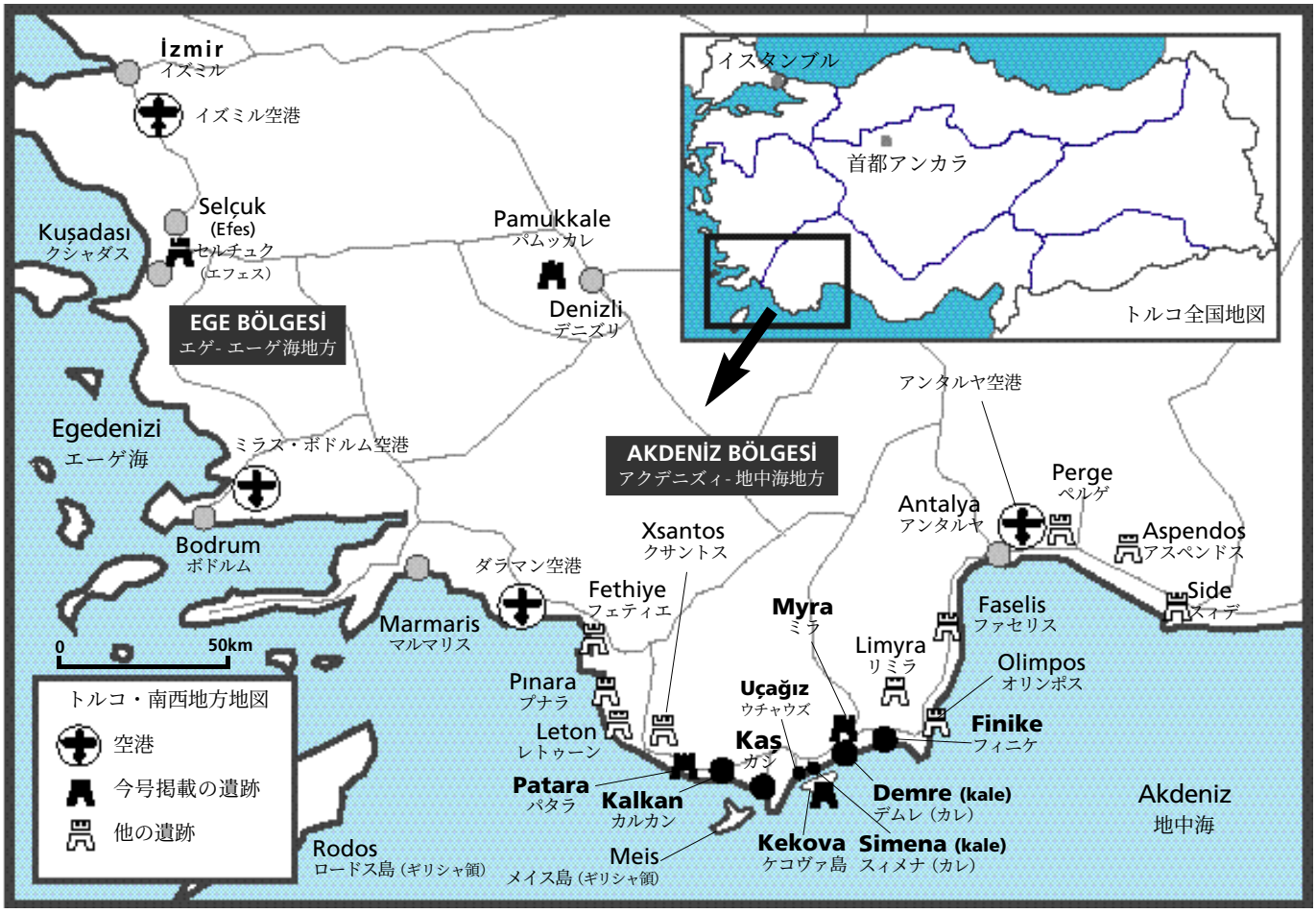
しばらく走ると、マーヴィ・マガラスが見えてきます。直訳すれば「青の洞門」、といえば日本の九州にも同名の奇勝があるのを、ご存知の方も多いことでしょう。

海上より眺めたウチャウズの石棺群（右頁写真）

ただ日本の「青」は、もともと地名の「阿於」（現在は「青」）に発するようですが、こちらは文字通り「海の青」です。地形や水底の関係で、ことに深い青色を造っている場所です。そういえば、"turquoise"は「トルコ石」、石の色から色名が生まれたのでしょうが、「ターコイス・コースト」という言い方は、まさに「トルコの海岸」にぴったりです。

やがて道を下って、美しい海と緑の丘を眺めながらカシの町に入ります。古代名アンティフェルス。湾は弧を描き、湾口に浮かぶ美しい緑の島の存在は、ここが古来の良港だったことを偲ばせるに十分です。トルコを美しい文章で綴る作家の新藤悦子さんが、学生時代にこの町のとりこになったと聞いていますが、数年後に再訪して風情の失われたことを嘆いていました。たしかに急速な観光化が進み、今宿泊施設には事欠きません。一般化即俗化と断じることは避けたいのですが、今以上の開発は、なくもがなという感じです。

私は一九八五年、九五年と九七年の三度この町を訪ねました。やはり八五年最初の訪問が印象的です。町の真ん中にぽつんと立った典型的なリュキア型の石塚、西洋朝顔が咲き乱れた海辺、港に並んだヨットの列も、当時は目新しく感じまし



陥没したシメナ海岸の石棺

た。もちろん古い町ですから、周辺一帯、数多くの遺跡にも恵まれていますが、何といってもこの町の魅力は、港町としてのたたずまい、そして新鮮な海の幸をふんだんに口にすることのできることでしょう。

紺碧の海と古代墳墓群

カシを出ると再び上り坂となります。そして海からはかなり離れた山間の道。十数年ままでは大変な悪路と聞いて、八八年にはレンタカー東から来て、手前のデムレで折り返しました。今はすっかりよくなっていて、快適なドライブが楽しめます。左右の山腹に古墳を遠望しながら下りに入ると、やがてデムレの町に入ります。この名称は地図上ではカレとなっていて、この方が正式名らしいのですが、デムレの方が一般的です。埃っぽい町ながら、ここがケコヴァなど古代水中都市のクルージングと、少し山手の興味深い「家墓」群の遺跡、ミラ見学の拠点です。

なお水中都市へは、カシからの船旅も可能です。時間の余裕があれば、この方がさらに多くの海からの奇観を楽しめるはずです。私は不幸にして、まだこのコースには経験がありません。

ケコヴァ

デムレの町から港までは数キロ、そこは古代アンドリアケの遺跡を近くに望む河口ですが、数人乗りの小型船が多数、あなたを待ち受けているはずです。ここでお決まりの値段交渉、なにぶん小舟に一命を託すことになるので、船頭との好関係は持っておきたい、ただし無用の恩恵も考えものですから、予め前の晩のホテルででも、相場を聞いておく方がよろしいでしょう。

まもなくエンジンの音も軽やかに？沖へ向かって滑るように港を出ると、紺碧の海と空とが一体となり、白雲が刷毛を描いて棚引いていることでしょう。右は本土、左に伸びるのがケコヴァ島です。舟はまず、本土側の洞窟に入るはずです。まあこれは日本各地の海にあるのと同様で、さして興味を引きませんが、そのあと岩間を抜けてケコヴァ島に近づき、船頭がエンジンを落としてくれる辺りから、水中都市が姿を現してきます。それは初め天然の岩かと見えますが、よく見るまでもなく人工構築物と分かります。家壁、階段、突堤などなど、上部を水面に出しながら、かなり原型をとどめて漣に揺れています。数百メートルは続くでしょうか、舟はゆっくり移動して、この奇観を心行くまで見せてくれるはずです。

もちろんその成因が気になるでしょう、もちろん地震による陥没です。一昨年のマルマラ大地震まで、知識としてはありながら、トルコでの地震は今一つ遠い現象に思われていました。この海を旅したときも、古代の珍事くらいの印象しか持たなかったものです。

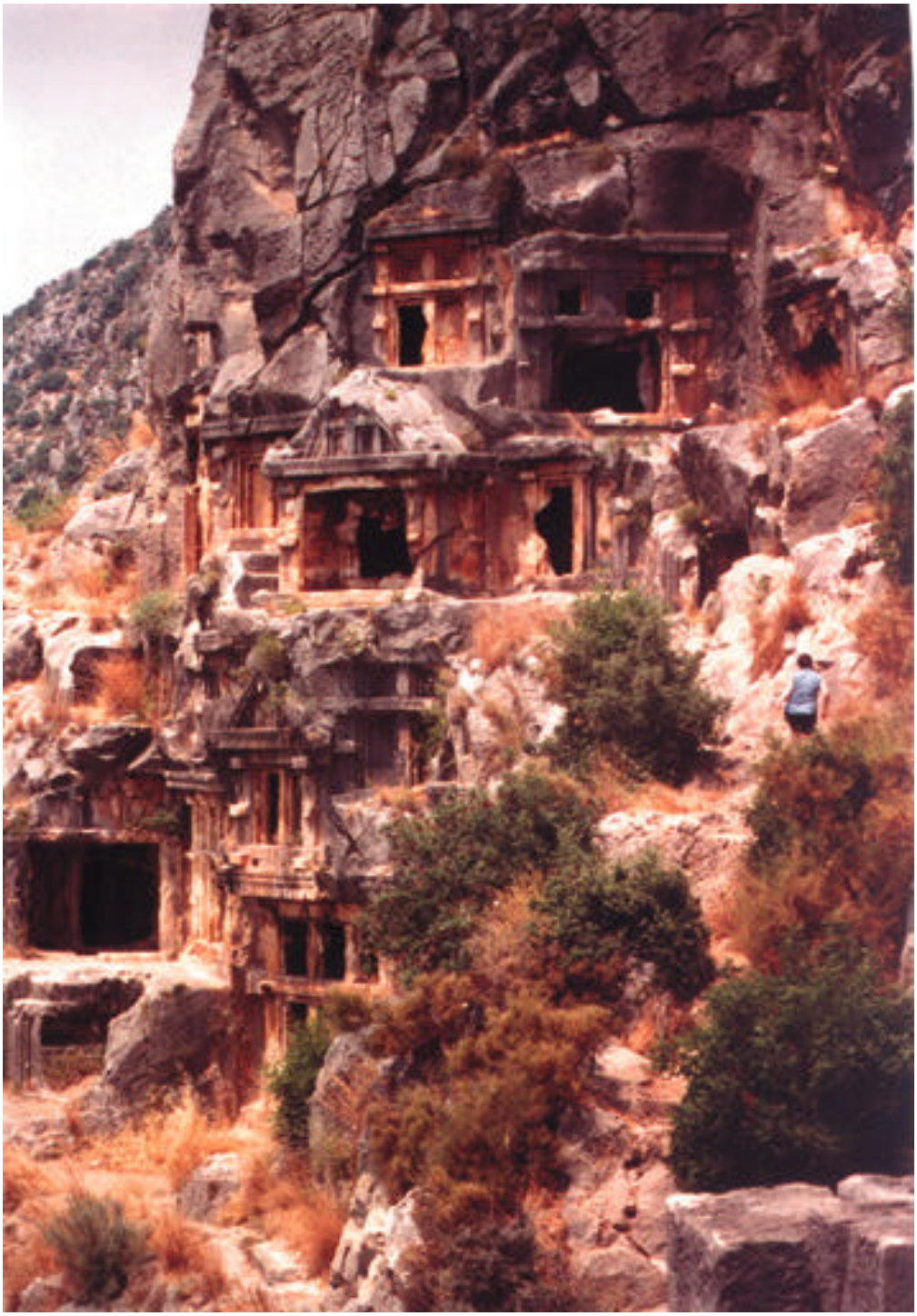
警告が所々にありますが、水泳やスキンダイビングは絶対禁止です。本土側か

ら望遠鏡で監視しているという話も聞きました。もう少し先へ進んで、ケコヴァの陸上遺跡のある地区の入り江に来れば、多数の人々が水浴を楽しんでいます。

ウチャウズとスィメナ

ケコヴァに上陸して一服ののち、舟は右へターンして対岸の本土側へ向かいます。この辺では、恐らくカシや、もっと遠くエーゲ海方面からからやって来るのでしょう、大型ヨットが、数多く観光客を運んでいます。ヨーロッパ人に人気のある南の海の風景です。

ウチャウズ、遺跡名としてはティミウサは湾の中の湾にあり、内湾口の狭い水路を抜けると正面の陸地に高く低く、無数の石棺が見えてくるはずです。そこにはじっさい名状し難い、どこにも例のな



ミラの横穴式「家墓」群

断崖を切り取って造られた珍しい「家墓」

い幽玄の世界があります。眼前に広がる石棺は、形状や大きさこそはほぼ一定していますが、向きや間隔はさまざまです。もちろんこれは、その台座となる岩の在り場所や、形によって左右されているということでしょう。向きはさまざまと言いましたが、基本的には屋根の片面が海に向かって、つまり海岸線に平行に据えられているように思いました。

こうした石造物はどこで、どのようにして造られたのでしょうか。まさか石材を他所から持ってくることもないでしょうから、この辺の岩が切り取られているはずです。リュキアに高度の石造技術があったことは、前回に触れた通りです。また工人の質もさることながら、それに携わった人の数もかなりに上ったことが窺われます。

ターンした舟は、ふたたび狭い水路を通ってスィメナの港に入ります。スィメナの現代名もカレというようですが、先ほどのデムレのカレとは別で、要するにお城のある場所は、どこによらず「カレ」と呼ばれているのでしょう。ここも舟を上がって右手の丘の上に神殿があり、城壁があります。これが「カレ」ということだと思います。スィメナの方が分かりやすいようです。

ただこのスィメナを印象付けるのは、そうした高所の遺跡よりも、港のすぐ左手、浅い海の中にわびしげに立つ一基の柱墓です（写真六頁）。八八年、九五年そして九七年、三度の訪問時に潮の干満の違いから、さまざまの相を見せてくれました。そしていつのときも、前にもある雑文に書きましたが、昔歌われた「海行かば」の歌に出てくる「水漬く（みづく）屍」という印象を、私は禁じ得ません。舟はここから帰路につきます。

ミラ

デムレの町へ帰り、山に向かって少々入ると、そこに家墓古墳群としてもっとも壮麗な、ミラの遺跡が広がっています、いや切り立っていると言う方がよろしいでしょう。ミラの起源は紀元前五世紀にさかのぼり、その後ずっとリュキア連合の中の主要都市でした。なおミラの名前は、ギリシャ語のミルー、「芳しい叢」のモディファイされたものだそうです。

さて遺跡の入り口に立つと、正面に円形劇場があり、その左右に無数の古墳が見られます。そしてさらに上方に目を転じると、断崖のてっぺんに神殿と城壁が望めます。これがすなわち「カレ」なのでしょう。この壮大な遺跡が示すように、ミラは紀元直前、クサントス陥落後しばらくして、ローマの侵攻を受けましたが、ローマ期からビザンチン時代を通じて、この地方のいわば首都として栄えたようです。ローマ皇帝や使徒パウロが立ち寄ったとも伝えられています。ミラはその後七世紀に到って、アラブの侵攻を受けるようになり十一世紀のはじめ、ついにアラブ水軍の攻撃によって破壊され、打ち捨てられたとのことです。

数え切れないほどの家墓が散在する中で、最も密集しているのは、やはり低いところで作業性がよかったのか、劇場向かって左脇の断崖の一帯です。そこにはさまざまの、横穴式の家墓が所狭しと彫

リミラで見つけたこの地方に多いカメ

られています。それぞれ葬られた人の、生前の家を模したことが明らかに窺えるのです。なおこの一帯の左手にある一基の墳墓は、一般の家墓が正面だけを見せているのと違って、立体的な造りになっていて、岩の塊を切り取って家の形を造り彫刻を施し、明らかにその側面も見られます。石工たちが自由に腕を振って造ったのでしょうが、これこそ文字通りの「家墓」だと思いました。

さて三度訪ねていつも思うことは、この地方はヨーロッパ人の独壇場だということです。イスタンブールやカッパドキアには、あれほど多くの日本の皆さんがやって来ているのに、とつい考えてしまいます。地理的な問題というより、日本人にはヨーロッパ人に比べて、陽光に対する憧れが少ないことがその理由かなと思っています。

なおデムレは、聖ニコラスの終焉の地ということになっています。出生地のパタラには何もありませんが、ここでは長年主教の座にあって、紀元三〇〇年に亡くなったとされています。その教会は今に残り、墓と称せられるものもあって、毎年十二月には盛大なお祭りがあると聞きました。私はその場所を知りませんが、ヨーロッパ人には格別の思いがあり、それが彼等の足をこの地方に向けさせている、一因かもしれません。

トルコ「海の道」を行く

デムレからフィニケまでの道は、「海の民」の居住地だったリュキア一帯の中でも特に、「海の道」と言っていいでしょう。その大半は片方に断崖、他方に海があるだけで、いわば海の中を走っているような感覚を覚えます。私の運転度胸からすれば、どうしても山に寄り沿いがちになるので、この道を走る場合、西行きはまあよいとして、東へ向かうときカーブなどで、どうも海に跳び込みそう錯覚に襲われてなりません。もっとも西へ向かっても、追越しを掛ける場合がちょっと問題です。走行の危険と引き換えに、風光は抜群といえましょう。道路以外に人工物は一切なく、青い海と褐色の岩浜に飛び散る白い波頭、焦らず急がず車を転がすには格好のルートです。

フィニケ

二〜三〇分ばかりの「海の道」が終わると、大きなオレンジの看板があって、長い砂浜と白い家並みが目には入ってきます。フィニケ、古代名はフェニクス、エジプト神話に出てくる不死鳥と、どう関係があるのでしょうか。紀元六五五年、アラブの水軍が歴史上初めて侵攻してきて、ビザンチンと決戦を演じたのが、今波静かなこのフィニケの沖合いだそうです。ところでオレンジの看板は伊達ではありません。ここから西へ山を越えたクムルジャはかけて、オレンジの一大産地です。収穫の季節になると、イスタンブールなど大消費地へ向かう、オレンジ満載のトラックの列が延々、そして気息奄々（えんえん）と、山坂を越えて鈍行していきます。

一九八八年の秋、退職後初めて三年ぶりでトルコの土地を踏みました。このとき前に述べたように、アンタルヤでレンタカーをして、初めて西へ向かい、フィニケまで行って宿を取りました。翻る万国旗に引かれて、タタール系トルコ人が経営する、「ウラル」（ロシアのウラル山脈の意味です）という名のペンションを選んだのです。珍しい日本人旅行者ということから、最大限の好意をかけてくれました。それ以来この小さな町が、すっかりなじみになったのです。先祖がロシア革命で母国を追われ、日本を経由してトルコに帰ったとも言っていました。九

リミラ、最も美しい典型的な「柱墓」

〇年にもう一度単身で泊まりましたが、三度目の九五年にはクローズしていたのが残念です。

この町自身には、長い清らかなビーチと、乱れ咲く夾竹桃が夏を演出する以外には、格別の見所はありません。アンタルヤとカシの中間にあって、一服するくらいがいいのでしょうが、一つだけやはり歴史を感じさせる、そしていかにも詩的情緒に富んだたたずまいを見せる遺跡が、町の背後にひっそりと眠っています。それがリミラ遺跡で、小さな円形劇場や初代ローマ皇帝アウグストスの孫で、皇位継承権を持ちながら、この地で戦病死したと伝えられる、ガイウスの墓などがありますが、中で目を引くのが、丘の中腹に屹立するリュキア型柱墓でしょう。紀元前四世紀のものということです。

この石棺はスマートな形状と美しいレリーフで優れていますが、それ以上にすばらしいのが、そのロケーションです。周囲は南面の草原で見晴らしがよく、はるかに望む山々の稜線との対比が、ここの風光を忘れ難いものにさせるはずです。九五年に行った時、同行の友人がカメを見つけました。日本で目にするものと違って、甲の高い種類です。この種のカメを見たのは三度目でした。つまりこの地方では格別珍しくもないのですが、「カメは万年」ということわざが、ふと長い歴史を感じさせてくれました。

さて次回は、このリミラからはるかに眺めた山々に分け入ってみましょう。

＊まだお読みになっていない方、「ビル・バシカ・イスタンブル」二八号から三〇号にかけて連載された赤松順太氏のトルコ北東地方シリーズ「奥の細道」も是非お読み下さい。

■筆者のプロフィール

赤松順太（あかまつじゅんた）

昭和６年、愛媛県宇和島市生まれ。

京都大学法学部卒業。三井物産在職中の昭和56年より４年間トルコに勤務。退職後も数回渡航し、長期の滞在経験あり。

＜著書＞『新トルコ風土記』

『アナトリア旅情』（写真集）

『トルコ生活紀行ートルコで日本を考えるー』

その他雑誌等に寄稿多数。